

仙台市文化財調査報告書第90集

# 若林城跡

— 平安時代の集落跡 —

1986年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第90集

# 若林城跡

— 平安時代の集落跡 —

1986年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

近年の大きく変質しようとする社会変動の中で、文化財行政に対する市民のニーズは高まりつつあります。

こうした中で、若林地区に所在する若林城跡の発掘調査が実施されました。若林城といえば伊達政宗が晩年に築いた居館として知られている造構であります。明治12年（1879）宮城集治監として利用され、現在も宮城刑務所として継続利用されている所であります。

本書は、城郭内に工場施設が建設されるための事前調査時の成果をまとめ公開する報文であります。築城以前の平安時代の竪穴住居跡、竪穴造構、古墳時代の古墳の馬溝などが検証され、興味のある歴史事象の発見となりました。

この調査に際しては、宮城県文化財保護課をはじめ、法務省、その他多くの御協力をいただきましたこと、衷心より感謝を申し上げますとともに、今後の文化財保護行政に対し市民の方々の一層の御理解を賜りますことを切望して序といたします。

昭和61年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は宮城刑務所内訓練新官工事に先だって行った若林城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の主体者は仙台市教育委員会で、宮城県教育委員会に御協力を願いした。
3. 発掘調査は仙台市社会教育課職員佐藤甲二、宮城県文化財保護課職員佐藤則之、笠原信男が担当した。
4. 報告書作成のための整理は結城慎一、渡辺誠、佐藤甲二が担当し、編集・執筆は佐藤甲二が行った。
5. 本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
6. 全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。

## 凡　　例

1. 本報告書中の土層の土色については「新版標準土色表」(小林、竹原: 1973) を使用した。
2. 本報告書使用の層位名として、ローマ数字は基本層位、算用数字は堆積土・埋土を表す。
3. 本報告図版内の表現として
  - (1) 方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°0'である。
  - (2) 土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。

### 発掘調査参加者名

境秀紀 中畑透 長谷川浩一 篠原徳明 滝川清人 高橋孝弘 植田純 下間健志 曽根宏  
 戸田泰史 広田正彦 西城潔 近藤宣浩 橋浦知宏 川島浩平 志賀保久 金里徹 小林聰  
 中島いく子 山田貞子 熊谷光一

### 遺物整理参加者名

赤井沢千代子 赤井沢進 糸谷明子、荷平克子 神成浩志 小林充 鈴木勝彦 大貫由美子  
 千葉一 西条裕子 谷津妙子

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と概要	2
1. 調査に至る経過	2
2. 調査方法	2
第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物	5
1. 古墳	5
2. 竪穴住居跡	7
第Ⅳ章 遺構の所属年代とまとめ	24
1. 遺構の所属年代	24
まとめ	26

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 調査対象区位置図	2
第3図 検出遺構全体平面図	4
第4図 古墳周辺平・断面図、 出土遺物(1)	5
第5図 古墳周辺出土遺物(2)	6
第6図 1号住居跡平・断面図	7
第7図 2号住居跡平・断面図、 出土遺物	9
第8図 3号住居跡平・断面図	11
第9図 3号住居跡出土遺物	12
第10図 4号住居跡平・断面図	13
第11図 4号住居跡出土遺物(1)	14
第12図 4号住居跡出土遺物(2)	15
第13図 溝跡、1号竪穴遺構平・断面図	17
第14図 2号竪穴遺構平・断面図、 出土遺物	18
第15図 3号竪穴遺構平・断面図、 出土遺物	19
第16図 1号土壙出土遺物	21
第17図 2号土壙平・断面図	22
第18図 2号土壙出土遺物	23
第19図 基本層位出土遺物	24

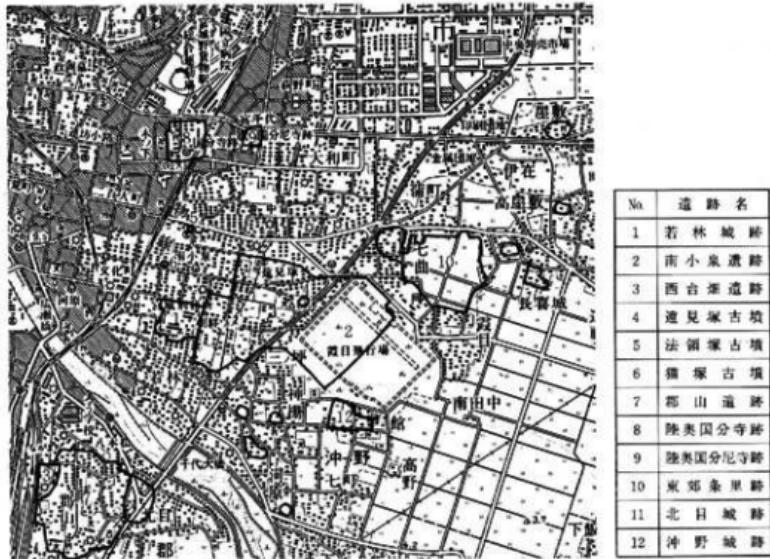
## 写真図版

図版1 遺跡全景	27
図版2 検出遺構1	28
図版3 検出遺構2	29
図版4 検出遺構3	30
図版5 検出遺構4	31
図版6 検出遺構5	32
図版7 出土遺物1	33
図版8 出土遺物2	34
図版9 出土遺物3	35

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

若林城跡は仙台駅の南東約1kmに位置する。仙台市は西側に丘陵地帯と段丘面が、東側には七北田川、名取川—広瀬川、阿武隈川によって形成された海岸平野が広がる。当遺跡は名取川の支流である広瀬川が形成した、沖積面左岸の自然堤防上（標高約12m）に立地する。遺跡の東には、弥生時代から平安時代までの大集落跡である南小泉遺跡が隣接する。また、北東側、北側1km以内には、東北第3位の規模を誇る遠見塚古墳や法領塚古墳・猫塚古墳が築かれている。

若林城は伊達政宗の晩年に、政宗の隠居所として築かれた居館である（寛永5年）。以前からこの地は「古城」と呼ばれ、かつて古城があったことが仙台古城書上に記されている。若林城の規模は資料が貧しく不明確であるが、懸構の広さは三町四方で、高さ二丈余の土手を築き、周囲に幅三十間の濠を2重にめぐらしていたとされている。政宗の死後（寛永13年）は廢城となり、城内の建物の大半は仙台城二ノ丸等の他の場所へ移築された。その後、城跡内は、明治12年に宮城県監が建設され、現在の宮城刑務所に至っている。現在、当時の若林城の面影を残すものは城を画する土塁と濠（一重）、西大手の樹形状の上塁、政宗が征韓の役の折持ち返ったとされる臥竜梅である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院1/50,000「仙台」を複製）

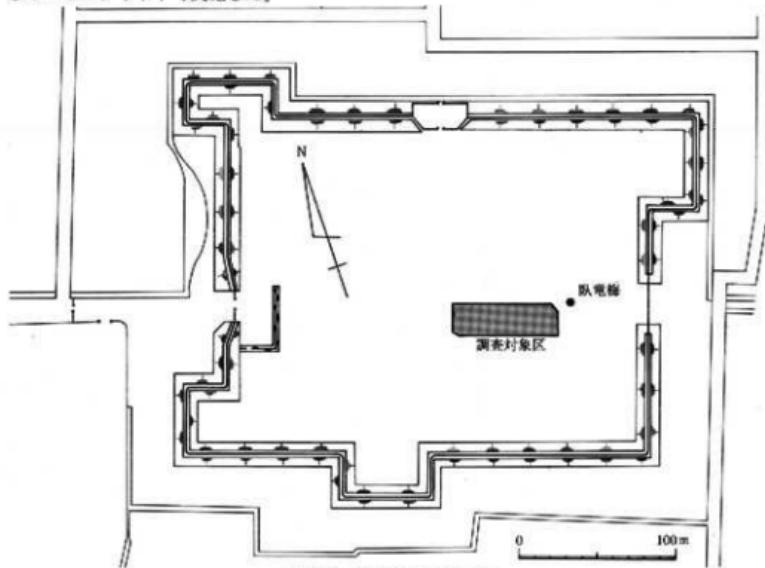
## 第Ⅱ章 調査の方法と概要

### 1. 調査に至る経過

宮城刑務所内に新たに職業訓練棟が建てられることとなり、昭和59年5月8日に試掘調査が行なわれた。その結果を踏え、県教育委員会、宮城刑務所三者協議の上、昭和60年7月2日より県教育委員会の協力で、本調査を実施する運びとなった。尚、昭和59年、調査対象区の南西側の構造建設の際にも調査が行なわれている。40m程の調査であったが、中世から近世頃のものと思われる掘立柱建物跡1棟とピット群が検出されている。

### 2. 調査方法

調査区は城内の東側中央付近に位置する。調査区の東側約60mには東門があり、また北東側約7mには臥竜梅が植えられている。調査区は建物予定面積より一まわり大きく設定した（西を除き他は全て1m拡大した。ただし、現在使用されている埋設管部分は除いた）。調査区東西ライン（64.5m）は建物予定部分の東西ラインに合せた。これと直交する南北ラインは磁北より約14°30'東へ傾く。調査は調査区南北ラインを北からA～D、東西ラインを西から1～11とする $6 \times 6$ mグリッドで実施した。



第2図 調査対象区位置図

### 3. 基本層位

現表土面のI層から地山面のIV層までの大別4層から成り、III層はさらにa・bに細分される。

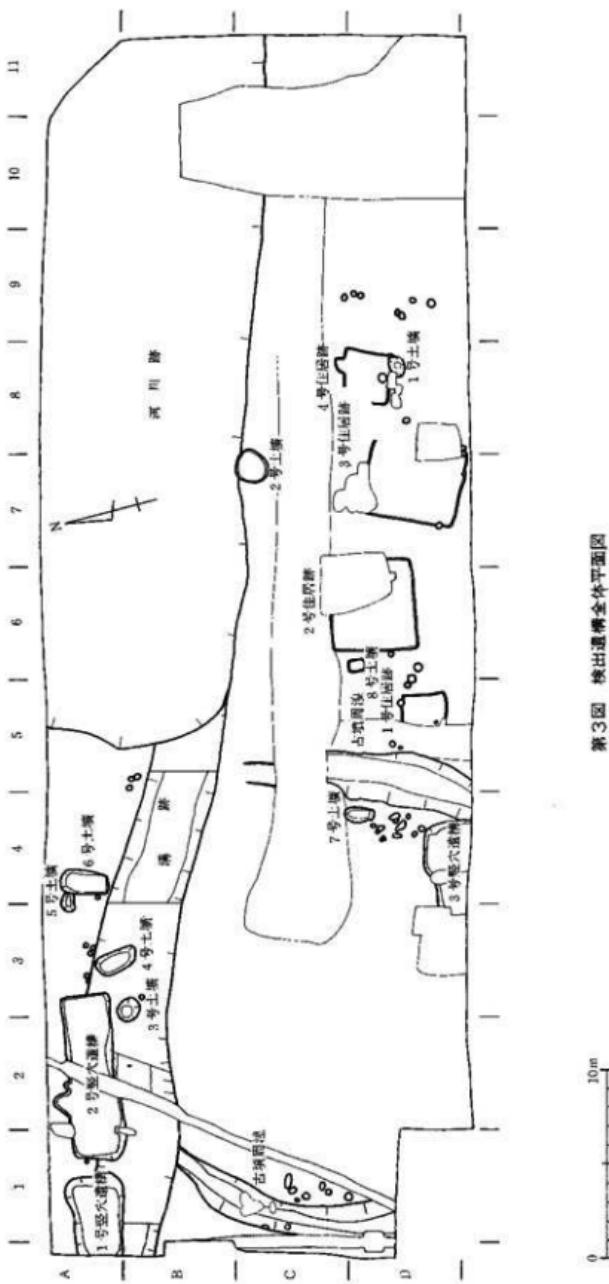
- I 層：暗褐色(10Y R 3%)シルトor砂質シルト。現表土層で、レンガ、大礫、鉄クズ、空缶等を含むカク乱層である。50cm前後の層厚であるが、地点によっては1m以上にもなる。
- II 層：にぶい黄褐色(10Y R 5%)シルトorシルト質粘土。瓦・レンガ等を含む。I層のカク乱層が加わる以前の明治以降のカク乱層である。層厚は不安定であるが、平均30cm前後である。調査区画全面に認められる。
- IIIa層：にぶい黄褐色(10Y R 5%)砂質シルト。粗砂・マンガン粒を含む、部分的に分布し、調査区北東側では約40cmと厚い。出土遺物はない。
- IIIb層：にぶい黄褐色(10Y R 5%)シルト質粘土。マンガン粒を少量含む。調査区東側（9ライン以東）部分には分布せず。層厚は30cm前後である。出土遺物はない。
- IV 層：黄褐色(10Y R 5%)シルト質粘土。当遺跡の地山層である。白色粘土ブロックを含む。上面はI・II層の影響（深度）で凸凹状となる。遺構は全て当層の上面で検出される。無遺物層である。

以上のI～IV層の内、I・II層は明治以降のカク乱層である。III層は自然堆積層と考えられるが、I・II層の影響で小断片的にしか認められなかった。IV層も上面がI・II層の影響を受け状態が悪いが、調査区内では北東側へやや下って行く。IV層以下は、A-2グリッドで約80cm下（標高10.50m）、C-10グリッドでは約130cm下（標高9.40m）で、それぞれ砂礫層となる。尚、若林城にともなう整地層と断定できるものは、今回の調査区内では認められなかった。

### 4. 調査概要

昭和60年7月2日に調査を開始し、8月7日の終了まで実働27日の調査日数を要した。調査面積は1,423m<sup>2</sup>である。I・II層は重機により排土を行った。両層はIV層上部まで影響を及ぼしている場合が多く、その結果III層は小断片的にしか残っておらず、III層面で明確な遺構を検出することは不可能であった。従って遺構検出面は全てIV層上面となつた。

検出遺構には古墳1基（周辺部のみ）、竪穴住居跡4軒、溝跡1条、竪穴遺構3基、土壙8基、ピットがあり、その他に河川跡が1本検出された。これら遺構は上部をI・II層による削平を受け、遺存状況は悪かった。出土遺物は4号住居跡を中心として、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、瓦、埴輪、鉄製品が平箱（テンバコ28）に4箱程出土した。これらの多くは破片資料である。出土資料中、最も多かったのはロクロ使用の土師器であった。



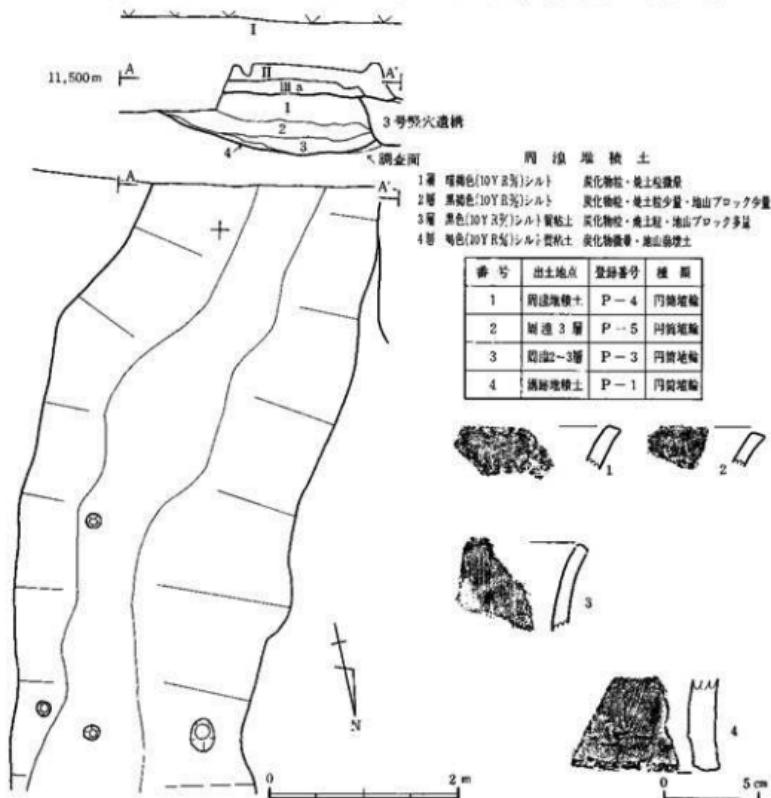
第3図 梁出遭構全体平面図

### 第III章 検出遺構と出土遺物

#### 1. 古 墳 (第3~5図)

調査区南西側 (B~D-1~5グリッド) で1基検出された。後世のカク乱により、墳丘はもとより周溝上部もすでに削平され、周溝底面付近が部分的に残存している状況であった。周溝は3号竪穴遺構、溝跡に切られている。

周溝は残存部分が良好な部分で、上端幅約1.5m、深さ60cmである。下端幅は0.5~1mで、下端ラインは不明確である。底面は凹状で、壁面は緩かに立ち上る。調査区内に於ける周溝の全般的な形状は、北側を欠くがほぼ円形を呈するものと思われる。周溝内側での直径は約22mで

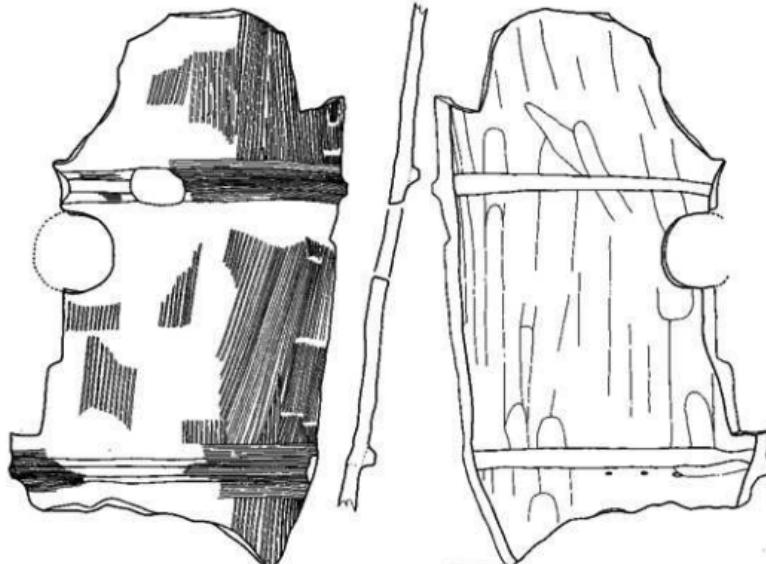


第4図 古墳周溝平・断面図、出土遺物 (1)

ある。周溝の堆積土は4層から成る。1・2層はシルトで、3・4層は粘土質シルトである。各層とも自然堆積状況を示す。

〔出土遺物〕堆積土、底面より土師器片(环・高环)、埴輪片が出土した。土師器片は少量の出土である。全て細片で、磨滅が著しいが、菲ロクロ使用のものと思われる。埴輪片は比較的多く出土した。

埴輪(第4・5図)：全て円筒埴輪で、口縁部から底部まで統く資料はない。口縁部はかるく外反するもので(第4図1～3)、底部付近はやや直立気味となる(4)。タガは2条貼り付けられしており、タガ間の幅は15.5cmである。タガの断面形はほぼ台形状のものや、やや「匂」状となるものが認められる。タガ間(上部のタガ付近)には円形のスカシ孔が1個穿たれており、反対側にももう1個穿たれていたものと思われる。スカシ孔の外面径は5cmを測る。外面調整はタガが貼り付けられる以前に縦方向の刷毛目が施される。さらにタガ及びその付近、口縁部にはヨコナデが加えられている。内面調整は縦方向のナデ(指ナデ?)が施され、タガ部分ではさらに横方向のナデが施された後、口縁部には横ナデが加えられる。色調は赤褐色のもののがほとんどで、数例褐色のものも認められた。器面には黒斑のみられるのはない。



第5図 古墳周溝出土遺物(2)

## 2. 積穴住居跡

積穴住居跡は調査区南東側、D-5~8グリッドで、まとまりを持って4軒検出された。ほぼ等間隔を持って東西に並んでおり、住居跡どうしの重複関係はない。各住居跡ともカク乱を受けており、完全なプランを残すものではなく、遺構の遺存状況は悪い。

### 1号積穴住居跡(第6図)

D-5グリッドに位置する。西側半分はカク乱により切られている。残存部分ではカマド、周溝は検出されなかった。

〔規模・平面形〕東西辺は不明であるが、南北辺は約2.4mを測る。平面形は方形を呈するものと思われる。

〔堆積土〕褐色シルトの単層である。

〔壁〕床面から比較的角度をもって立ち上る。壁高は最も残存状況が良好な北壁で10cmを測る。

〔床面〕中央東壁寄りの80×70cmの範囲が浅い窪み状(深さ5cm)となっている。さらにこの内には小ピット状の凹部が2ヶ所みられ、中央付近には焼け面が認められた。貼床は施されていない。

〔ピット〕南東コーナー付近で、貯蔵穴状のP

1が1個検出されたのみである。上端・下端平面形とも不整格円形を呈す。上端規格80×65cm、下端規格60×50cm、深さ30cmを測る。底面はやや凹状となり、断面はひらいた「U」字状である。堆積土は大別2層(細別3層)から成る。

〔出土遺物〕堆積土中より土師器片(环・高台付环・甕)、須恵器片(环)が少量出土したのみである。

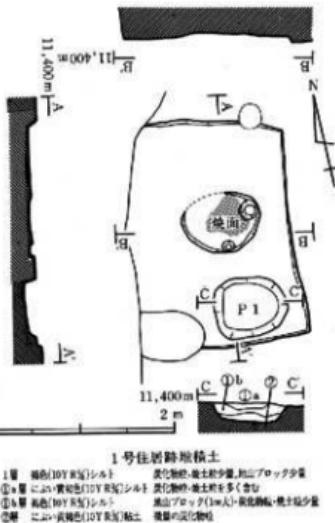
### 2号積穴住居跡(第7図)

1号住居跡の北東側、D-6グリッドに位置する。北東側(全体の約1/4)をカク乱によって切られている。残存部分ではカマド、周溝は検出されなかった。

〔規模・平面形〕南北辺4.3m、東西辺4.8mの長方形を呈する。

〔堆積土〕褐色シルトの単層である。

〔壁〕床面から角度をもって立ち上る。壁高は残存良好な南壁でも15cm前後で、北壁では5cm程度の高さしかない。



第6図 1号住居跡平・断面図

1号 住居跡地盤土  
① 塗褐色(10YR 5/1)シルト  
② 壁に近い褐色(10YR 5/1)シルト  
③ 壁褐色(10YR 5/1)シルト  
④ 壁に近い灰褐色(10YR 4/1)粘土

1号 住居跡地盤土  
① 塗褐色(10YR 5/1)シルト  
② 壁に近い褐色(10YR 5/1)シルト  
③ 壁褐色(10YR 5/1)シルト  
④ 壁に近い灰褐色(10YR 4/1)粘土

1号 住居跡地盤土  
① 塗褐色(10YR 5/1)シルト  
② 壁に近い褐色(10YR 5/1)シルト  
③ 壁褐色(10YR 5/1)シルト  
④ 壁に近い灰褐色(10YR 4/1)粘土

1号 住居跡地盤土  
① 塗褐色(10YR 5/1)シルト  
② 壁に近い褐色(10YR 5/1)シルト  
③ 壁褐色(10YR 5/1)シルト  
④ 壁に近い灰褐色(10YR 4/1)粘土

〔床面〕ほぼ平坦である。貼床は施されていない。

〔ピット〕5個検出された。P2～P4はともに柱痕が認められ、規模もほぼ同一のもので、柱穴と考えられる。柱間距離は南北4m、東西1.8mである。P1は南東コーナー付近に位置し、上端長辺80cmの隅丸方形を有するもので、深さは約30cmを測る。底面は凹状で、断面形は「U」字状である。貯蔵穴と思われる。堆積土は大別2層（細別4層）から成る。

ピット名	上端規模	下端規模	深さ	ピット名	上端規模	下端規模	深さ	ピット名	上端規模	下端規模	深さ
P1	80×73cm	56×42cm	27cm	P2	柱痕 30×34cm	23×16cm	23cm	P3	柱痕 25×22cm	14×11cm	28cm
P4	柱痕 20×15cm	16×11cm	32cm	振り方 40×32cm	30×28cm	22cm		振り方 32×30cm	27×25cm	21cm	
	振り方 35×28cm	25×25cm	26cm	P5	40×—cm	34×—cm	18cm				

〔出土遺物〕堆積土中、P1・2・3・5（堆積土・振り方）から土師器片（坏・甕）、須恵器片（坏・甕）が出土した。また、弥生土器（樹形圓式）の小破片が1点（写真図版9-1）出土した。この内図示できたものは土師器坏2点、須恵器坏1点である。

#### 土師器

坏（第7図1・2）：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形には体部が丸味をもって立ち上り、口縁部が外反するもの（1）と、口縁部がやや直線的に外傾するもの（2）がある。ともに内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

#### 須恵器

坏（第7図3）：器形は体部から口縁部にかけてやや直線的に外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。底部外面には「X」のヘラ記号が認められる。

### 3号竪穴住居跡（第8・9図）

2号住居跡の南東側、C-7・8グリッドに位置する。北西・南東側はカク乱により切られ、また残りの東側も削平を受け壁面ではなく、床面の上部をわずかに残すような状態で検出された。残存部分ではカマド、周溝は検出されなかった。

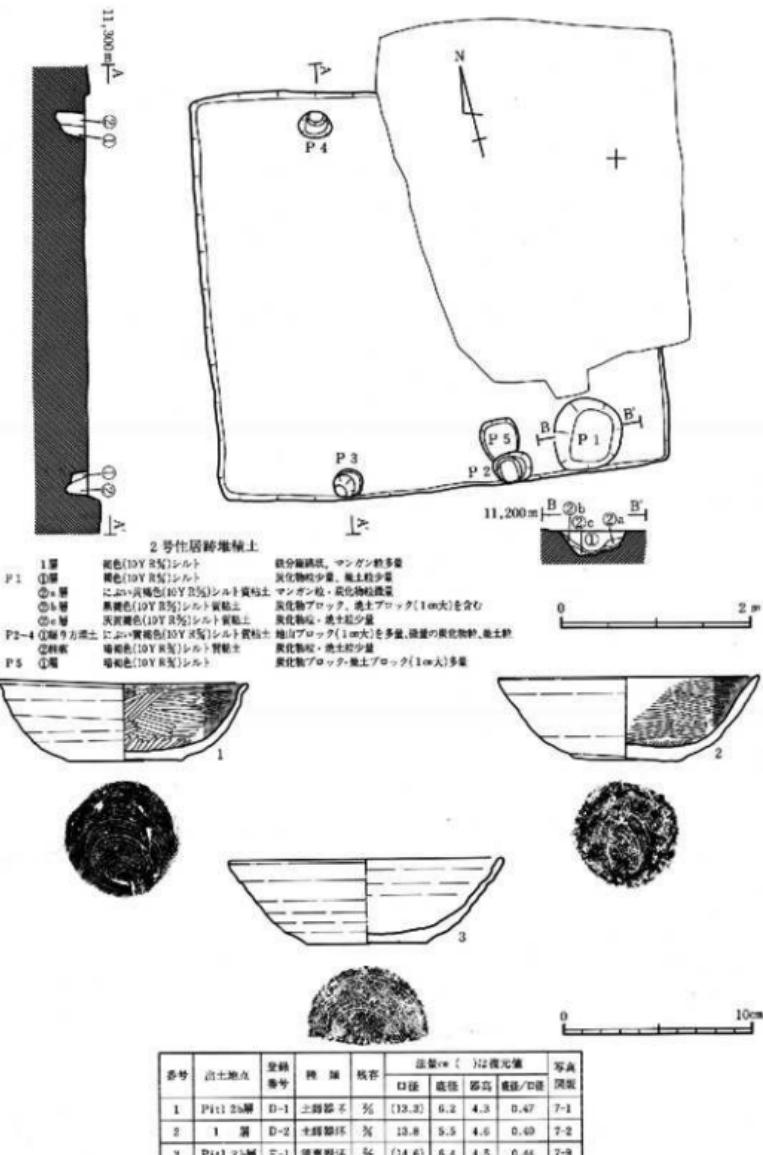
〔規模・平面形〕南北辺5m、東西辺4m強の長方形を呈するものと思われる。

〔堆積土〕2層から成る。黒褐色シルト層の2層中には多量の炭化物、焼土ブロックを含む。

〔壁〕西壁はややきつく立ち上る。壁高は西・南壁で15cm程度を測るが、東・北壁では残存状況が悪い。特に東壁では北東コーナーの一部を残すのみである。

〔床面〕やや凸凹状である。周縁部には幅50～100cm、深さ5～20cmの振り方がめぐらされ（1点鎖線の外側）、貼り床が施されている。床面のほぼ中央部には、約100×80cmの範囲で強い焼け面が認められた。

〔ピット〕5個検出された。柱痕の認められたものはない。P4・P5は柱穴になる可能性もある。



第7図 2号住居跡平・断面図、出土遺物

P 1は南東コーナーに位置し、上端長辺110cmの隅丸長方形を呈するもので、深さは50cm以上と深い。底面はやや凸凹状で、壁はきつく立ち上る。貯蔵穴と思われる。地積土は人別2層（細別4層）から成る。

ピット名	上端規模	下端規模	深さ	ピット名	上端規模	下端規模	深さ	ピット名	上端規模	下端規模	深さ
P 1	110×95cm	65×55cm	56cm	P 2	50×45cm	40×35cm	15cm	P 3	60×55cm	45×45cm	17cm
P 4	23×23cm	18×16cm	21cm	P 5	22×22cm	19×16cm	18cm				

〔出土遺物〕堆積土中、P 1～3（堆積土）、貼床より土師器（壺・甕）、須恵器（壺・壺・甕）、石製品（紡錘車）、風化し識別不能な鉄製品が出土した。床面からは小鉄澤が1点出土したのみである。これらの内、図示できたものは土師器壺2点・甕3点、須恵器壺1点、紡錘車1点である。

#### 土師器

壺（第9図1・2）：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形は体部が丸味をもって立ち上り、口縁が（かるく）外反する。内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向へのラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離しは両者とも磨滅のため不明瞭であるが、回転糸切りで無調整のものと思われる。

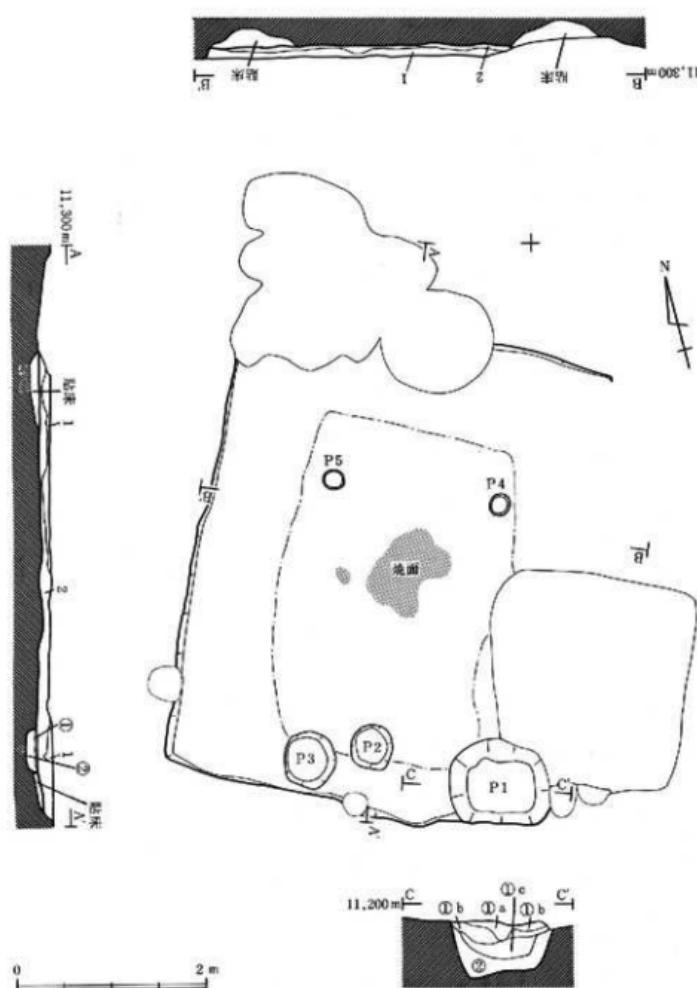
甕（第9図4～6）：いずれも製作に際してロクロを使用している。大型のもの（5・6）と小型のもの（4）がある。大型のものは口縁～体部資料で、長胴のものである。口縁部は外反し、口縁部端部は上方へ摘み上げられている。5は最大径を口縁部に持つ。内外面調整はロクロナデの後、外面下半はヘラケズリ、内面下半はナデが施されている。6は最大径を体部上半に持つ。内外面調整ともロクロナデである。小型のものは口縁より器高が低く、最大径を口縁部に持つ。口縁部形態は大型のものと同様である。内外面調整ともロクロナデである。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

#### 須恵器

壺（第9図3）：器形は体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

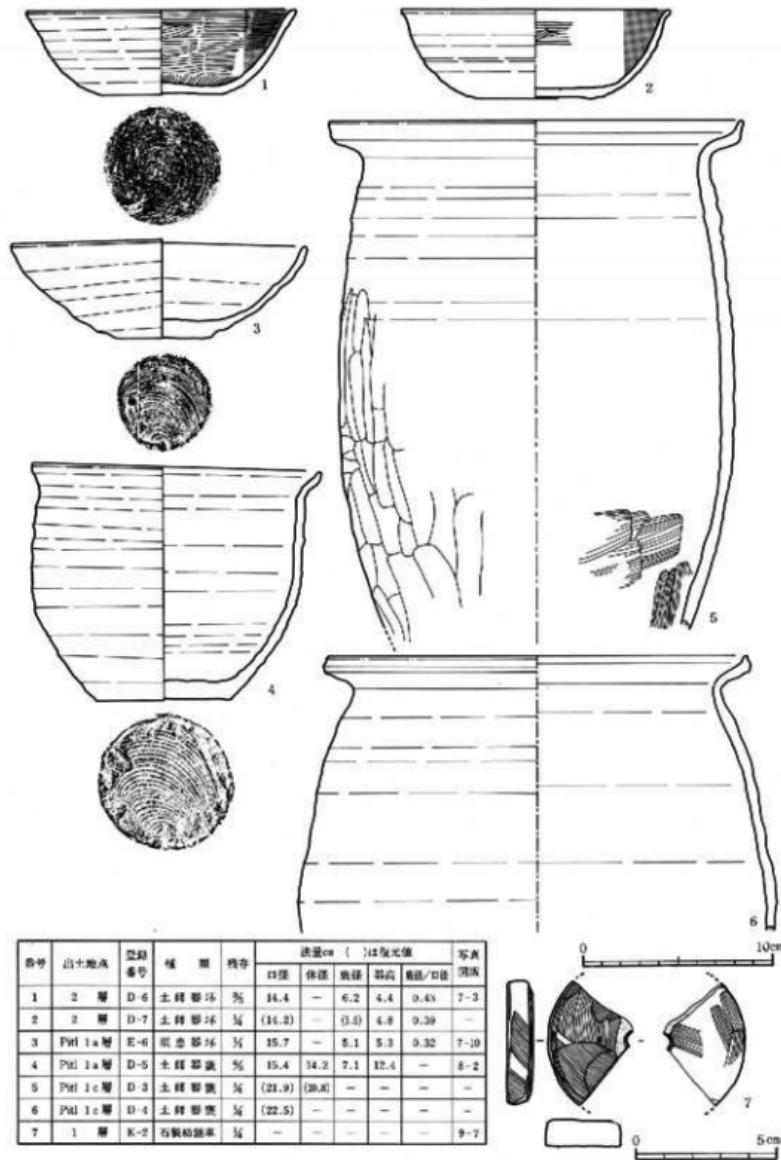
#### 石製品

紡錘車（第9図・7）：約1/2の破片資料である。扁平なもので中央に小孔が穿たれている。断面形はやや台形状を呈す。上面周縁部は面とりがされ、全面に明瞭な擦痕が認められる。上・下面径推定5.6・6.0cm、孔径0.6cm、厚さ1.0cmを測る。



第8図 3号住居跡平・断面図

- |      |                  |                                        |
|------|------------------|----------------------------------------|
| 1層   | 磯崎砂岩(シラカニシヤク)    | 泥炭質粘土・地表少部分                            |
| 2層   | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表少部分、東側に粘土層、東側に粘土ブロック少量         |
| 3層   | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表少部分                            |
| 4層   | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表少部分                            |
| P1   | にかく実測柱状(シラカニシヤク) | 泥炭質粘土・地表上部・下部をセメント化した部分                |
| P2   | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表上部・下部をセメント化した部分、底付粘土・底付アーリック岩層 |
| P3   | にかく実測柱状(シラカニシヤク) | 泥炭質粘土・地表上部・下部をセメント化した部分                |
| P4   | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表上部・下部をセメント化した部分                |
| P5   | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表上部・下部をセメント化した部分                |
| PF-1 | 高純度白雲石(シロカルサイト)  | 泥炭質粘土・地表上部・下部をセメント化した部分                |



第9図 3号住居跡出土遺物

#### 4号竪穴住居跡(第10~12図)

3号住居跡の北東側、C・D-8グリッドに位置する。南側を1号土壌、ピット、カク乱に切られている。上部をかなり削平されており、壁の残存は悪く、北東コーナーでは不明確である。周溝は検出されなかった。

〔規模・平面形〕壁の残存状態が悪く、明確な平面形は把握できなかったが、1辺2.6前後の正方形状のプランを呈するものと思われる。

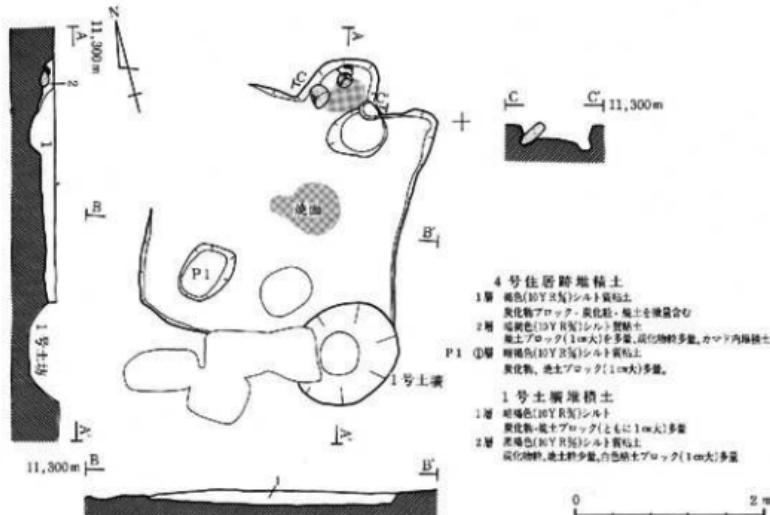
〔堆積土〕2層から成る。カマド上の堆積土2層はカマド崩落土と考えられる。

〔壁〕東壁は比較的の残存状態が良く、壁高は12cmを測る。底面からの立ち上りは急角度である。

〔床面〕ほぼ平坦である。中央付近に70×50cmの範囲で焼け面が認められた。貼床は施されていない。

〔ピット〕南西コーナー付近でP1が検出されたのみである。上端・下端規模65×50cm・55×35cm、深さ26cmを測る。堆積土は単層である。

〔カマド〕北壁中央よりやや東側に位置する。北壁を掘り込んで燃焼部が作られている。燃焼部はやや凹状で、幅・奥行きとも50cmを測る。中央奥壁寄りには支脚用の円礫が、下端を少し埋め込むような状態で置かれていた。また支脚用礫上には土器器の小型甕の体部～底部破片(少存、第12図4)が、被せたような状態で出土した。焚き口付近の袖には礫が使用されていたらしく、下端を床に埋め込んだ礫が、焚き口付近と思われる場所の西側より1個出土した。反



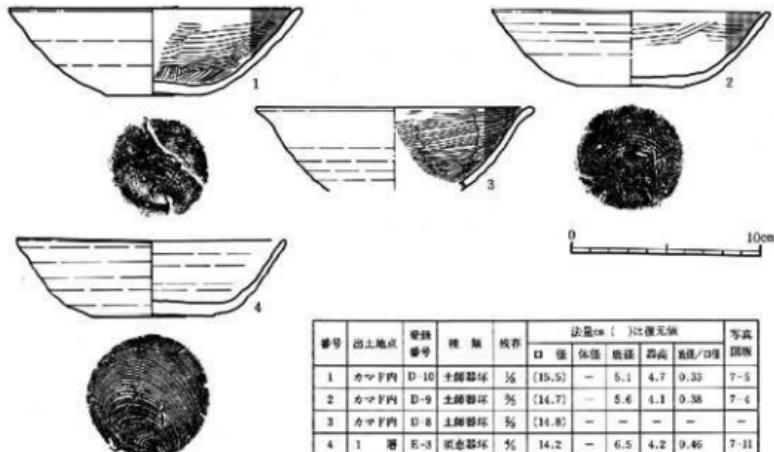
第10図 4号住居跡平・断面図

対側のほぼ同位置にも疊の据え方が認められた（これに接する南側には抜き取り穴が認められた）。支脚と袖石を結ぶ範囲内は、強い焼け面がみられた。

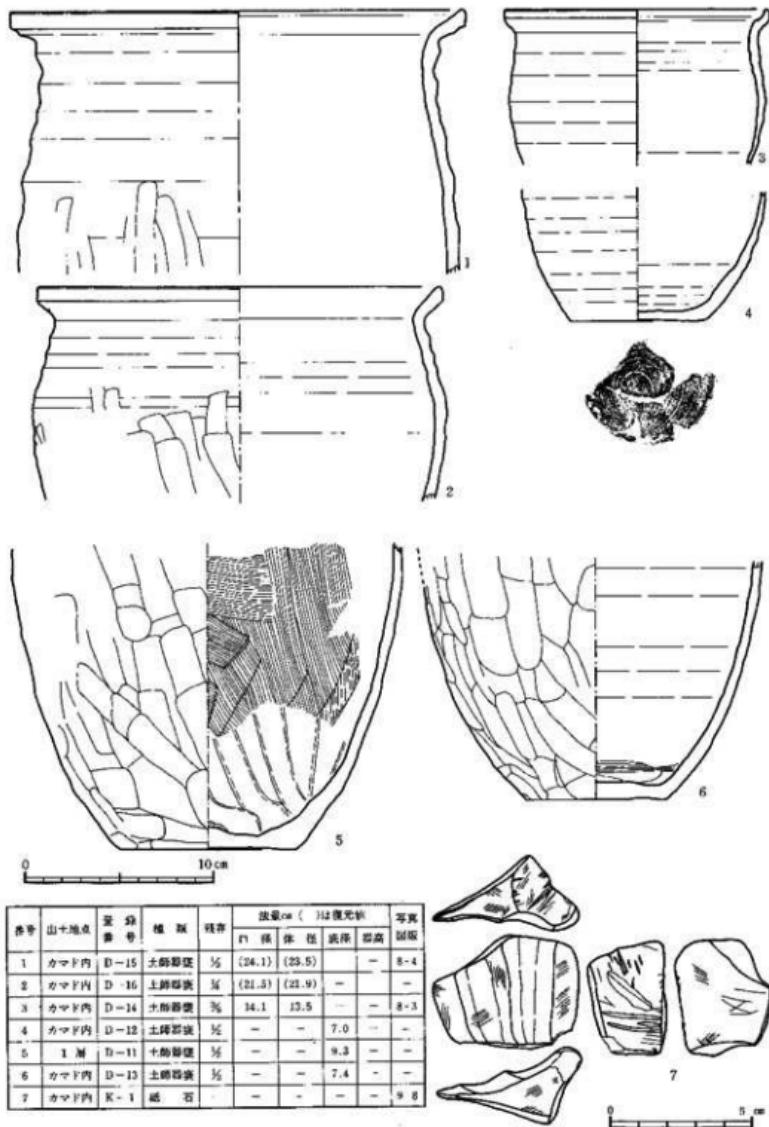
〔出土遺物〕堆積土中、カマド内より土師器(壺・甕)、須恵器(壺・甕)、石製品(砥石)が出土した。これらの内、図示できたものは土師器壺3点・甕5点、須恵器壺1点、砥石1点である。土師器

壺(第11図1~3)：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形には体部から口縁部にかけてやや直線的に外傾するもの(1)、体部は丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもの(3)と口縁部がやや直線的に外傾するもの(2)がある。内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。1・2の底部切り離しは回転糸切りで、無調整である。3は高台が付く可能性もある。

甕(第12図1~6)：口縁部から底部まで続く資料はない。口縁～体部上半資料には大型のもの(1・2)と小型のもの(3)がある。大型のものは長胴になるものと思われる。1は口径と体径がほぼ同じである。口縁部は外反し、口縁端部は上方へやや摘み上げられている。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリが加えられる。内面調整は磨滅のため不明瞭であるがロクロナデと思われる。2も口径・体径ともほぼ同じもので、口縁部は外反し、口縁端部は肥厚する。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリ、内面調整はロクロナデである。小型のものは最大径を口径にもつもので、器高より口径の方が大きいものと思われる。口縁部は外反し、口縁端部は上方へ摘み上げられる。内外面調整ともロクロナデである。体部



第11図 4号住居跡出土遺物(I)



第12図 4号住居跡出土物 (2)

下半～底部資料にも大型のもの(5・6)と小型のもの(4)がある。大型のもの外面調整は体部がヘラケズリ、底部ナデ、内面調整は体部がヘラナデ、体部下半～底部がナデツケである。小型のものは内外面ともロクロナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

#### 須恵器

壺(第11図1)：器形は体部が丸味をもって立ち上り、口縁部がやや直線的に外傾する。底部の切り離しは回転糸切りで、無調整である。

#### 石製品

砥石(第12図7)：小型の不整形なものである。全面に擦痕が認められる他、表面には2条の幅広い溝状の凹面がみられる。

### 3. 溝 跡(第3・13図)

調査区北西側、A・B-1～5グリッドにかけて1条検出された。やや蛇行しながら東西方向(N-68°W)に走行するが、B-5グリッドで河川跡に切られ東へ延びていない。また、上面を1・2号竪穴造構、土壤、ビットに切られている。上端幅は約4m、下端幅は1.5m～2m、深さは上面の削平の度合によって異なり60～110cmを測る。底面はB-4グリッド付近は平坦であるが、A・B-1・2グリッド付近では強い凹状を呈す。底面の標高はA-1グリッドで10.07m、B-5グリッドで10.32mと約20cmの差がみられる。壁は緩かに立ち上る。堆積土はB-5グリッドの観察では6層から成る。1～5層はシルト質粘土であるが、3層には砂、2・5層には小礫を含み、最下層6層は砂質シルトであることより、2層以下は水の影響の下に堆積したことと考えられる。

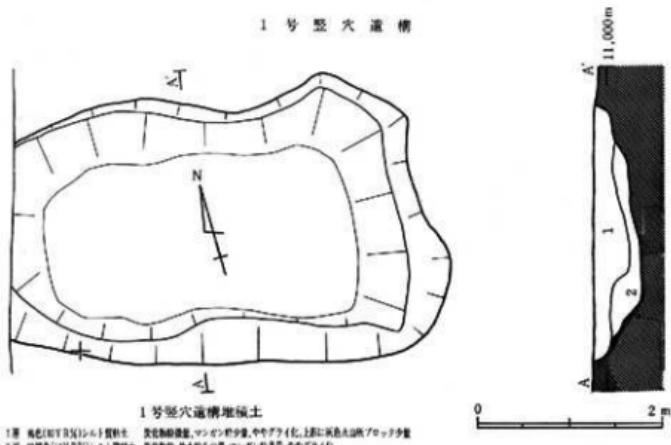
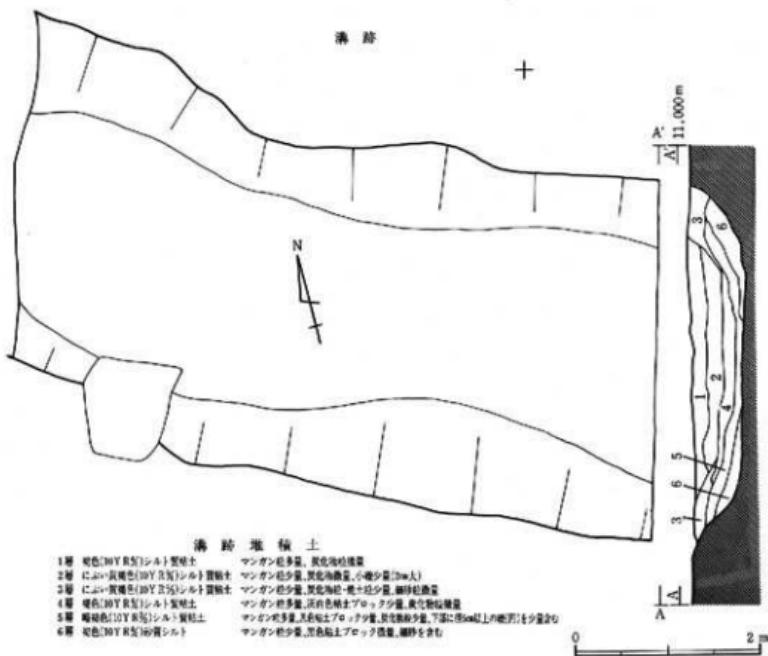
(出土遺物) 堆積土中より非ロクロ使用の土師器(壺・甕)、ロクロ使用の土師器(壺・高台付壺・甕)、須恵器(甕)、埴輪(円筒埴輪)の細片を出土した。

### 4. 竪穴造構

調査区西側の北と南で3基検出された。北側の1・2号は約1mの間隔で東西に並ぶ。いずれも不整形形状のもので、底面には柱穴やその他の施設を持たない。またいずれも長辺を同一方向(東西)に向いている。

#### 1号竪穴造構(第13図)

A-1グリッドに位置する。西側の上端は調査区外に延び不明である。溝跡を切っている。上端・下端平面形とも不整開丸長方形を呈す。上端規模5.0?×3.0m、下端規模3.2×1.7m、深さ50cmを測る。壁には底面から約30cmの高さで段が形成されている。壁は段を挟んだ上下とも緩やかな立ち上りを示すが、段より下の方がやや緩やかである。底面は中央が四状となる。堆積



第13図 溝跡、1号豎穴造構平・断面図

土は2層から成り、自然堆積状況を示す。1層上部には灰白色火山灰の小ブロックを含む。

〔出土遺物〕土師器（壺・甕）、風化し識別不明な鉄製品の細片が、堆積土中より少量出土したのみである。

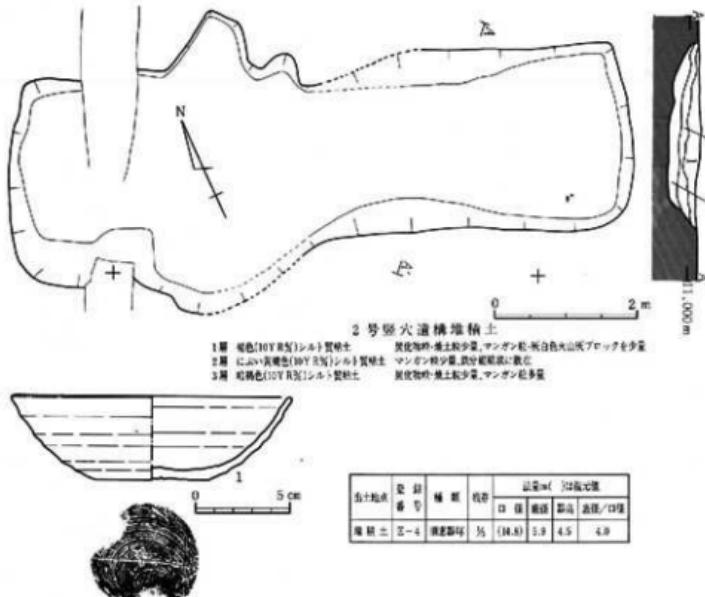
## 2号竪穴遺構（第14図）

A-1～3グリッドにまたがって位置する。溝跡を切っている。中央部は南北に走る埋設管部分（幅約1m）のため調査が不可能であった（破線部分）。上端・下端平面形とも中央部がやや括れ、西側が不整形に眼らむ。上端規模8.8×2.6～4.3m、下端規模8.5×1.6～3.9m、深さ40cmを測る。壁は緩やかに立ち上り、底面は凸状である。堆積土は3層から成り、自然堆積状況を示す。堆積土1層中には灰白色火山灰のブロックを少量含む。

(出土遺物) 土器片(坏・高台付坏・甕)、須恵器片(坏)が堆積土中より少量出土した。図示できたものは須恵器坏1点である。

須惠器

坏(第14図1)：器形は体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。底部外面には「×」のヘラ記号が認められる。



第14圖 2号墳室遺構平・断面図、出土遺物

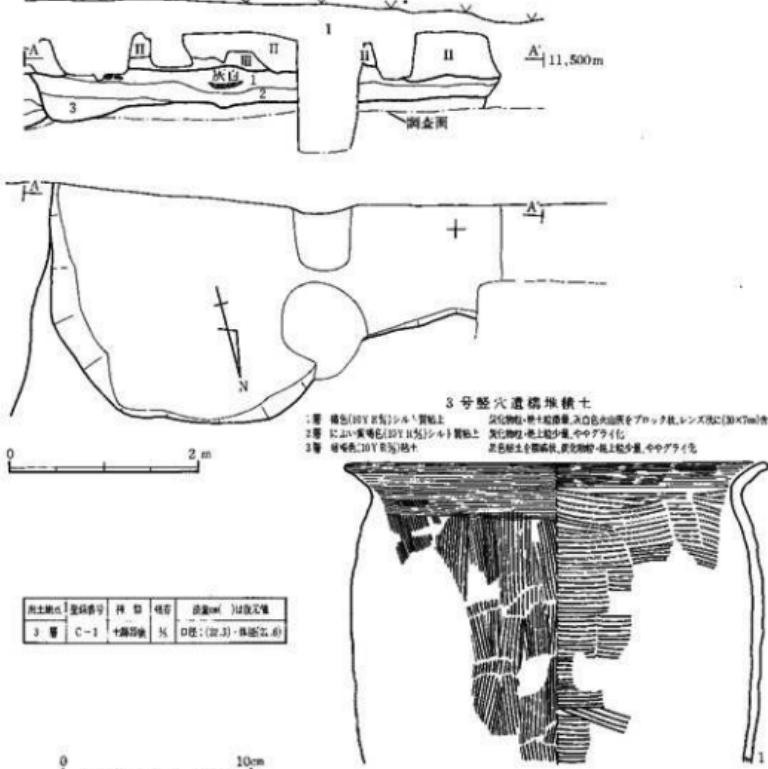
### 3号竪穴遺構

D-3・4グリッドに位置する。古墳の周溝を切っている。南側は調査区外へ延びて不明である。西側もカク乱に切られている。上端・下端平面形とも不整方形を呈するものと思われる。上端規模5.5×3.0m以上、下端規模5.0×2.5m以上、深さ40~50cmを測る。壁はややきつく立ち上る。底面はやや凸凹状となる。堆積土は3層から成り、自然堆積状況を示す。1層中にはレンズ状に灰白色火山灰の塊が認められる。

〔出土遺物〕土師器片(腰)、埴輪片(円筒埴輪)が少量出土した。全て堆積土中よりの出土である。図示できたものは土師器腰1点である。

#### 土師器

腰(第15図1)：製作に際してロクロを使用していないものである。口縁～体部にかけての



第15図 3号竪穴遺構平・断面図、出土遺物

資料である。口縁部が外反し、体部上半がやや膨む器形で、口径と体径はほぼ等しい。外面調整は体部が縱方向の刷毛目その後、口縁部はヨコナデで、内面調整は口縁部から体部にかけて横方向の刷毛目その後、口縁部にはヨコナデが施されている。

## 5. その他の遺構

その他の遺構として土壙、ピットがある。遺物を出土するものが少なく、これらの内には明治以降のものも含まれている恐れもある。また、遺構とは言い難いが、河川跡が1本検出されている。

### 土 壙

8基検出された。1号土壙（第10・16図）は4号住居跡の南東コーナー付近を切っている。上端平面形1×1.2mの楕円形で、深さは30cmを測る。堆積土は2層から成る。ともにシルトで1層中には炭化物、焼土粒を含む。底面から浮いた状態ではあるが、土師器、須恵器がまとまって出土した。2号土壙（第17・18図）はC-7グリッドに位置する。上端・下端平面形とも円形を呈する円筒状の土壙である。上端径150cm、下端径85cm、深さ85cmを測る。底面付近より瓦がまとまって出土した。他の3～8号までの土壙からは出土遺物はなかった。

土壙番号	基 区	平 面 形				堆積土量	出 土 遺 物	土 壙 号	平 面 形				堆積土量	出 土 遺 物		
		上 端	下 端	上 端	下 端				上 端	下 端	上 端	下 端				
1	D-8	楕円形	円	130×130	40	30	2	十字鋸・焼土粒	2	C-7	円	円	130	85	1	瓦
3	B-23	楕円形	円	130×115	60	65	1	無	4	A-B-3	椭 圆	椭 圆	230×210	170×175	1	無
5	A-24	楕円形	不規則四角	110×45	75×30	8	1	無	6	A-4	洗玉形方	洗玉形方	160×125	215×150	1	無
7	D-4	楕円形	椭圆形	160×80	115×40	5	1	無	8	D-6	乐形容	乐形容	90×95	75×50	1	無

### 〔1号土壙出土遺物〕

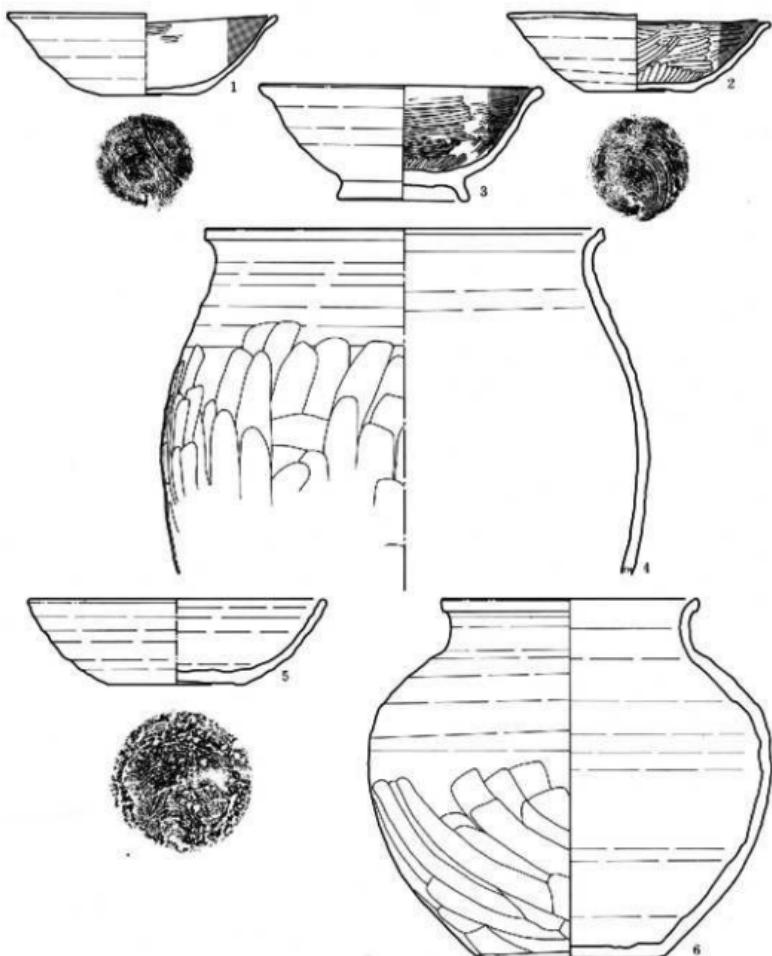
土師器（环・高台付环・甕）、須恵器（环・壺）が出土した。この内、図示できたものは土師器环2点・高台付环1点・甕1点、須恵器环1点・壺1点である。

### 土師器

环（第16図1・2）：いずれも製作に際してロクロを使用している。器形は体部が丸味をもって立ち上り、口縁部が外反する。内面調整は底部付近が放射状、口縁～体部が横・斜め方向のヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。

高台付环（第16図3）：製作に際してロクロを使用している。环部の器形・調整・底部の切り離し技法は环と同様である。高台部は「八」の字状の付高台で、底部周縁及び高台内外面にロクロナデを施している。

甕（第16図4）：製作に際してロクロを使用している。体部下半を欠失する。最大径は体部上半に持つ、長胴のものである。口縁部は外反し、口縁端部はやや上方へ摘み上げられている。



番号	出土地点	基盤 番号	種類	底序	測量cm( )は復元値					等高 図版	
					口径	底径	高さ	容積	底径/口径		
1	2層	D-20	土器	器	%	14.3	—	4.9	4.3	0.34	7-7
2	1層	D-19	土器	器	%	13.9	—	5.4	4.2	0.39	7-6
3	2層	D-18	土器	器	%	15.0	高合後7.0	6.1	—	—	7-8
4	2層	D-21	土器	器	%	(B.2)	(B.3)	—	—	—	8-5
5	1層	E-5	土器	器	%	(B.3)	—	7.3	4.6	0.46	8-1
6	2層	E-7	土器	器	%	(B.6)	10.0	21.3	19.1	—	8-6

第16図 1号土壤出土遺物

外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリが施されている。内面調整は不明瞭であるが、ロクロナデが施されている。

#### 須恵器

壺（第16図5）：体部から口縁部まで丸味をもって外傾する器形である。底部の切り離しは回転系切りで、無調整である。

壺（第16図6）：最大径を体部上半に持ち、器高より体径の大きいものである。ほぼ直立する短い頸部に、外反する口縁部が付く。口縁端部は肥厚する。外面調整はロクロナデの後、体部下半にヘラケズリ、底部はナデツケが施されている。内面調整はロクロナデの後、底部にナデツケが施されている。

#### 〔2号土壙出土遺物〕

瓦は全て本瓦で、焼し瓦である。丸瓦・平瓦・道具瓦（熨斗瓦）が見られる。

瓦（第18図）：丸瓦・平瓦とも全て破片資料で、計測できるものはない。熨斗瓦は比較的残存が良く長さ約28cm、最大幅約14cmのものが3点みられた。また熨斗瓦には刻印があるものが2点（2・3）認められた。

#### ピット

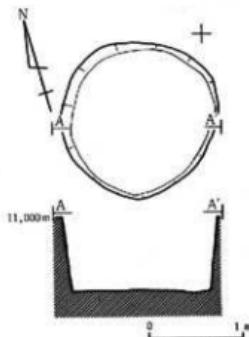
52個検出された。この内柱痕を持つものが数例あった。規模・配列・配置に規則性を見い出すことはできなかった。ピット内より遺物を出土したものはない。

#### 河川跡

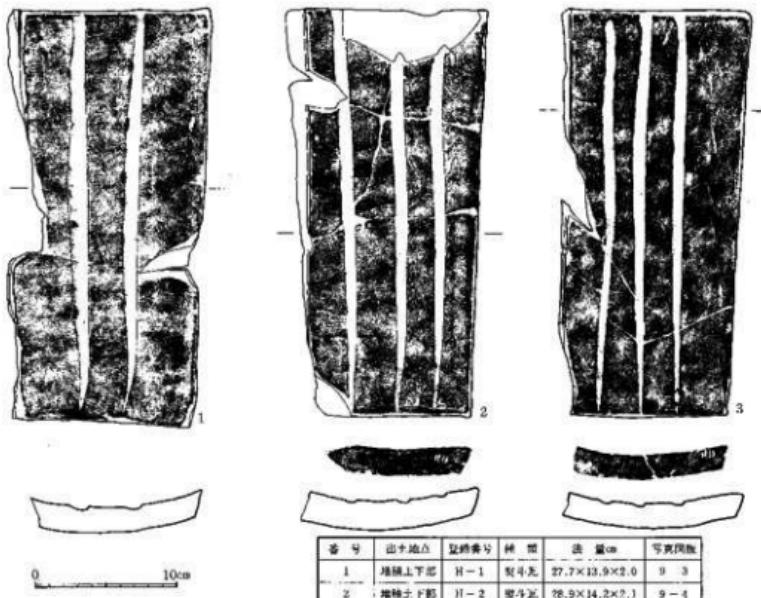
調査区北東側、A～C～5～11グリッドで検出された。溝跡を切っている。南岸は検出されたが、北岸は調査区の外（北側）に位置する。南壁は直線的ではなく、「L」字状に曲っている。河川幅は不明であるが、調査区東側（10ライン）のカク乱部よりの断面観察では、深さは約2mである。堆積層は大別4層から成り、1層はシルト質粘土層、2層は幅50cmの砂礫層、3・4層は粘土層で、10cm幅の4層中には未分解の植物が含まれる。

## 6. その他の出土遺物

基本層位I・II層中より出土した遺物である。ほとんどが瓦片であるが、陶器片もわずかに1点出土した。



第17図 2号土壙平・断面図



第18図 2号土塙出土遺物

瓦（第19図）：軒丸軒が1点出土している。焼し瓦である。瓦当面の資料で、瓦当面の径は約18cmである。周縁は中高縁で、瓦当文様は内区に左巻きの三ツ巴文が、外区には連珠がめぐる。

陶器（写真図版9-2）：1点出土した。志野焼の碗？である。体部下半の破片資料である。外面文様は不明で、内面には界線（いすれも鉄絵）がめぐっている。内外面の施釉は長石釉で、貫入が認められる。また、内面には目跡がみられる。慶長期の作と考えられ、寛永頃には廃棄されたのではないかと思われる。



第19図 基本層位出土遺物

## 第Ⅳ章 遺構の所属年代とまとめ

### 1. 遺構の所属年代

#### (1) 古 墓

今回の調査で最も古い遺構として位置づけられるもので、1基検出された。墳丘部及び周辯上部はすでに削平され、周辯底面付近がわずかに残存するのみである。周辯底面・堆積土より当古墳に伴ったと考えられる円筒埴輪の破片が比較的多く出土した。完全な形に復元できる資料は得られなかつたが、内外面調整・タガ・スカシ孔の位置・形状の特徴は、同地域の表町古墳<sup>11</sup>、大野田古墳群出土の円筒埴輪に類似を認められる。これら古墳は伴出遺物の年代より、5世紀後半から6世紀初頭に位置づけられており、当古墳の所属年代もほぼ同時期のものと考えたい。

#### (2) 積穴住居跡

4軒検出された。これら住居跡より出土した陶化資料（土器）により、その所属年代の検討を加えたい。これら住居跡に伴う土器は床面、カマド内、貯蔵穴内出土のもので、2～4号住居跡から出土をみている。また、3号住居跡床面上の2層（炭化物混在層）出土のものも、床面出土のものと大差がないものと考え同等のものとして取り扱った。

2～4号住居跡よりは土師器壺・甕・須恵器壺が出上している。しかし、各住居跡ごとに土器の組み合せが異っている（2号住…土師器壺・須恵器壺 3号住…土師器壺・甕・須恵器壺 4号住…土師器壺・甕）。ただし、土師器壺は各住居跡に共通しており、これを仲介すれば、共通しない他の土器も共伴関係として捕えられる。これら土器は全て製作に際してロクロを使用している。このような特徴をもつ土器群は、東北南部の土師器編年では「表杉ノ入式」に比定されており、共伴関係にある須恵器も同時期のものと考えられる。従って、2～4号住居跡の所属年代は平安時代に位置づけられる。

さらに、出土土器の細部にわたる検討を進めることとする。土師器壺・須恵器壺の器形、製作技法に関しては、口径に比べ底径が小さく、やや深い器形で（土師器壺一底口比平均0.40、口高比平均3.2、須恵器壺一底口比平均0.38、口高比平均3.1）、底部の切り離しは全て回転糸切りで、調整がされないものである。土器の組み合せに関しては、いずれの住居跡よりも赤施土器の出土をみていないという特徴が上げられる。

これらの特徴を白鳥氏による多賀城内の土器編年<sup>12</sup>に対比すると、土器の組み合せの点ではD群土器に、器形的特徴の点ではE群土器に位置づけられるものと思われる。次に、一般集落で土師器壺の底部が回転糸切り無調整のみで構成されている出土例は、安久東遺跡1～3号住居<sup>13</sup>跡、清水遺跡27・50号住居跡、9号溝内1号土壙<sup>14</sup>に求められる。両遺跡の土師器壺の器形的特

徴は、当遺跡のもの以上に底口比、口高比が少ない。また、土器の組み合せの点では赤焼土器壺を共伴している。両遺跡を白鳥氏の土器編年に対比すれば、土器の組み合せの上ではD群土器、土師器壺の器形的特徴の上ではF群土器に位置づけられるものと思われる。D～F群土器は「官衙・城柵・寺院跡における土器群出土状況、窯跡での瓦との共伴関係および灰白色火山灰との層位関係」よりD群土器—9世紀後半頃、E群土器—10世紀前半頃、F群土器—10世紀中頃の年代が与えられている。<sup>注6</sup> 安久東遺跡では2号住居跡出土の灰釉陶器の年代より、住居跡供出土器の年代を10世紀後半頃としており、清水遺跡出土土器もこれを基準とし、同年代のものとしている。<sup>注7</sup> 以上のように安久東遺跡、清水遺跡の資料はE群土器、F群土器のいずれに対比した場合にも、それぞれ時間差が認められる。

以上を踏まえた上、当住居跡の出土土器の上限はD群土器からE群土器にかけての年代が与えられよう。下限については多賀城内出土土器群（E or F群土器）と一般集落跡出土土器群（安久東遺跡1～3号住居他）の間に時間差が認められること、また、当遺跡に赤焼土器が共伴しないことより流動的である。従って、2～4号住居跡の所属年代は9世紀末頃から10世紀にかけての年代を想定したい。尚、1号住居跡は時期決定資料に貴重な遺構であったが、堆積土中より2～4号住居跡と同時期の土器片を出土している。また、住居跡の配置関係に於いても等間隔に並列するという規則性が認められることより、2～4号住居跡とはほぼ同時期のものと考えたい。

### (3) 溝跡・豎穴遺構

豎穴遺構は3基検出された。これら全ての堆積土上部には、10世紀前半に下降したと考えられる灰白色火山灰が小ブロック状、小レンズ状に含まれていた。従って、3基ともほぼ同時期のものと思われる。重複関係では溝跡と豎穴遺構（3号）はともに古墳の周溝を切っている。また、豎穴遺構（1・2号）は溝跡を切っている。出土遺物では溝跡、豎穴遺構堆積土中には、ともにロクロ使用の土器碎片を含んでいる。以上、豎穴遺構の堆積土、重複関係、出土遺物の点より、溝跡は平安時代に埋ったものと考えられる。ただし、豎穴遺構の所属年代が10世紀前半以前に位置づけられることより、溝跡は平安時代でも前半には埋っていたと想定される。両遺構とも住居跡群との時間的な関係については、出土遺物の点、重複関係がない点より、言及はできない。

### (4) その他の遺構

1号土壙、2号土壙は出土遺物より所属年代は、平安時代、近世と考えられる。1号土壙は4号住居跡を切っているが、出土土器に大差が認められない点より、住居跡群とはほぼ同時期かやや後続する時期のものと思われる。2号土壙は今回の調査で検出した遺構中、若林城関係の

遺構として認定された唯一のものである。

## 2. まとめ

1. 若林城跡は広瀬川によって形成された標高12mの自然堤防上に立地している。
2. 検出遺構には古墳時代中期後半～後期初頭頃の古墳1基（周溝のみ）、平安時代の竪穴住居跡4軒、溝跡1条（上限時期不明）、竪穴遺構3基、土壙1基、若林城に関係する土壙1基の他、時期不詳の土壙、ピット、河川跡がある。
3. 出土遺物には弥生土器、土師器（ロクロ不使用、ロクロ使用）、須恵器、陶器、瓦、土製品、石製品、鉄製品があり、その多くは破片資料である。全体的に出土量は少ない。
4. 若林城関係の資料は上記2号土壙の他、若干の陶器片、瓦片が出土したのみである。従って、今回の調査区内では、すでに若林城関係のものはその後の建造物等によって破壊され、消滅してしまったものと思われる。

## 註 記

- 註1 伊藤信雄・伊藤玄三・若瀬康治「妻町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集 1974
- 註2 長島栄一「大野田古墳群」「年報3」仙台市文化財調査報告書第41集 1981
- 註3 氏家和典「東北土師器の形式分類とその歴史」「歴史」第14輯 1957
- 註4 白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」「研究紀要」W 宮城県多賀城跡研究所 1980
- 註5 註4記載の同資料より抽出したD～E群土器の土師器環、須恵器环の内、底部の切り離しが開拓系切りで無調整のものに関する底口比、口高比の平均は以下のようになる。ただし、同資料からの数値のため、精度には欠ける。また、註8の安久東遺跡（註6同資料より抽出）、清水遺跡（註7同資料より抽出）の数値も同様である（安久東遺跡底口比に関しては図文資料）
- |      |              |        |              |        |
|------|--------------|--------|--------------|--------|
| D群土器 | 土師器環—底口比0.42 | 口高比3.3 | 須恵器環—底口比0.45 | 口高比3.5 |
| E群土器 | 土師器環—底口比0.40 | 口高比3.0 | 須恵器環—底口比0.44 | 口高比3.3 |
| F群土器 | 土師器環—底口比0.36 | 口高比2.8 | 須恵器環—図示資料なし  |        |
- 註6 上坂山式「安久東遺跡」「東北新幹線岡田遺跡調査報告書W」宮城県文化財調査報告書第72集 1980
- 註7 井羽茂・小野寺洋一郎・河野博志「清水遺跡」「東北新幹線岡田遺跡調査報告書W」宮城県文化財調査報告書第77集 1981
- 註8 安久東遺跡 土師器環—底口比0.37 口高比2.9  
清水遺跡 土師器環—底口比0.36 口高比3.0
- 註9 白鳥良一「第4章 2 (2) 土器」「多賀城跡報告書」本文編 宮城県多賀城跡研究所 1982
- 註10 安久東遺跡報告文中（註6）では、この灰釉陶器の年代を11世紀頃としたが、その後の鹿島遺跡、竹之内遺跡の報文中（佐々木和博「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集 1984）で10世紀後半頃に訂正している。したがって、清水遺跡出土土器の年代も今後同様に変更されるものと考える。



1. 若林城跡遠景



2. 調査前風景（東より）  
図版1 遺跡全景



1. 古墳周辺発掘状況（Aライン 南より）



2. 古墳周辺発掘状況（D-Eライン 南より）

図版2 検出遺構1（古墳周辺）



1. 古墳周辺内円筒埴輪出土状況



2. 1号住居跡発掘状況（南から）  
図版3 掘出遺構2（古墳周辺、1号住居跡）



1. 2号住居跡発掘状況（南から）



2. 3号住居跡発掘状況（南から）  
図版4 検出遺構3（2・3号住居跡）



1. 4号住居跡カマド完燃状況（南から）



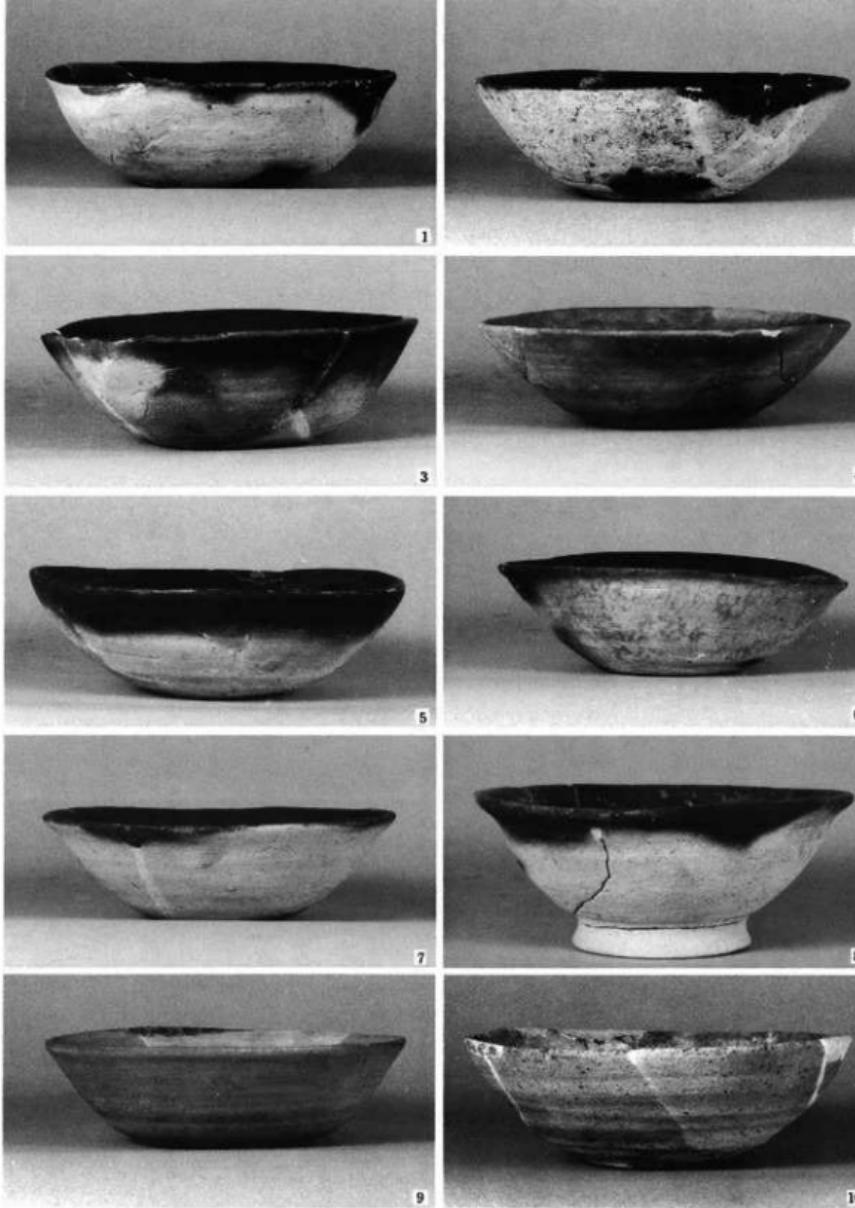
2. 1号竪穴道構造完燃状況（南から）  
図版5 検出遺構4（4号住居跡、1号竪穴道構）



1. 1号土塙遺物出土状況（南から）

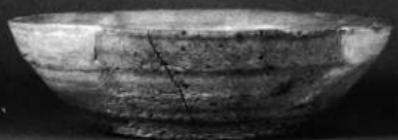


2. 2号土塙完掘状況（東から）  
図版6 検出遺構5（1・2号土塙）



土器類：1～8  
 1. 第7回1 2. 第7回2  
 3. 第9回1 4. 第11回2  
 5. 第11回1 6. 第16回2  
 7. 第16回1 8. 第16回3  
 9. 第7回3 10. 第9回3  
 11. 第11回4

図版7 出土遺物1



1



3



5



2



4



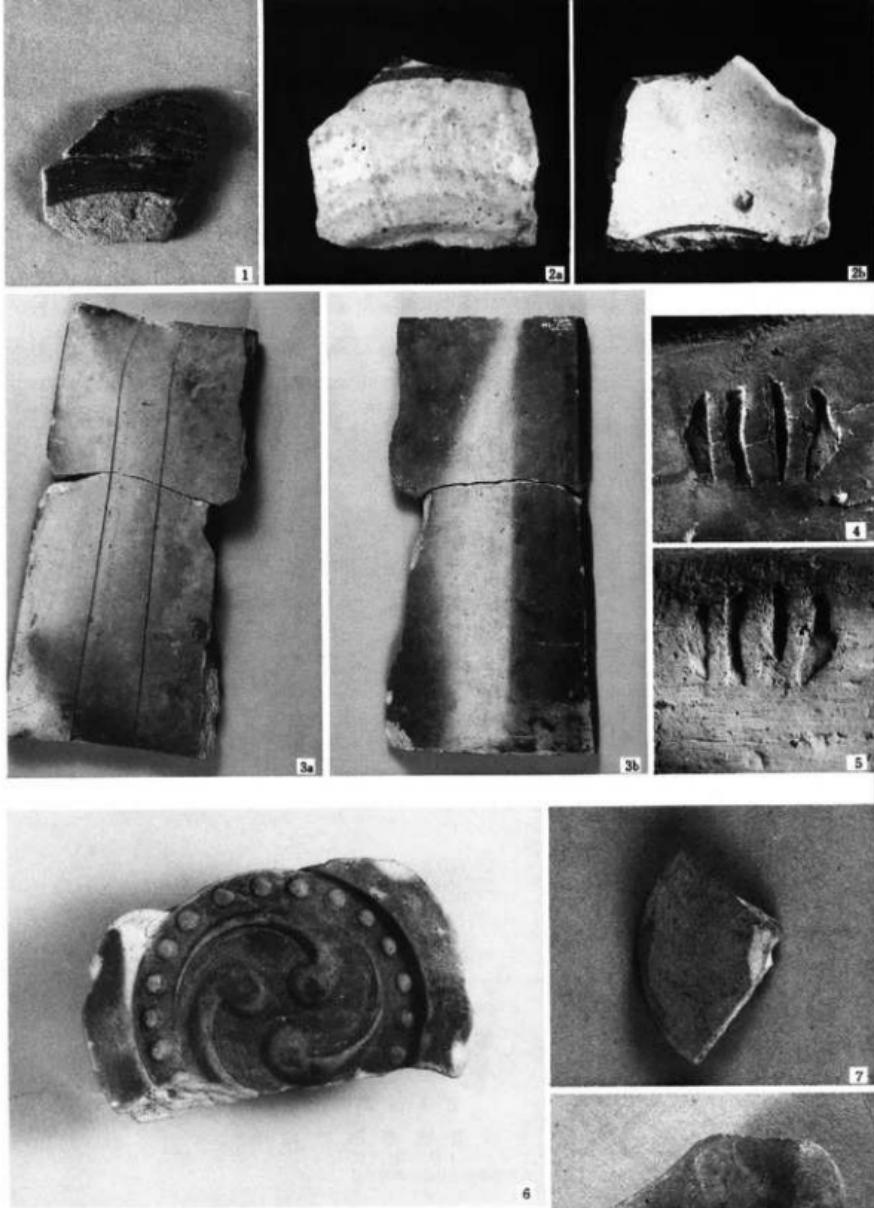
7

上部器：2～5 條底器：1・6 塵輪：7

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. 第16圖 5 | 2. 第9圖 4  |
| 3. 第12圖 3 | 4. 第12圖 1 |
| 5. 第16圖 4 | 6. 第16圖 6 |
| 7. 第5圖    |           |

圖版8 出土遺物2

7



浮生土器：1. 斧器：2. 瓦；3～6(4・5は刻印) 石製品：7・8  
 3. 第18図1 4. 第18図2  
 5. 第18図3 6. 第19図  
 7. 第9図7 8. 第12町7

図版9 出土遺物3

## 職 員 錄

### 社会教育課

### 文化財調査係

課長	阿部 達	係長	佐藤 隆	主事	工藤哲司
主幹	早坂春一	主事	結城 慎一	タ	渡部弘美
		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 誠
		主事	木村 浩二	主事	主浜光朗
		タ	篠原 信彦	タ	斎野裕彦
係長	佐藤政美	教諭	小野寺和幸	タ	長島榮一
主事	岩沢克輔	タ	佐藤美智雄	タ	及川 格
タ	山口 宏	主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		タ	金森 安孝	タ	松本清一
		タ	佐藤 申二	主事	高橋 泰
		タ	吉岡 康平	タ	鈴木善弘
				派遣職員	高橋勝也

(昭和61年3月現在)

---

仙台市文化財調査報告書第90集

### 若林城跡

—平安時代の集落跡—

昭和61年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市上杉1-5-1

仙台市教育委員会社会教育課

TEL(代)61-1111

印刷 東北プリント

仙台市立町24 24 TEL 63-1166

---

